

平成29(2017)年「正覚寺報」1月号

ご案内

修正会(元旦会) 元旦(日)7時～

新年をご本堂で御門徒の皆様と共にご本尊様にご挨拶申し上げます。

仏教婦人会新年会 1月16日(月)13時～

仏教婦人会恒例の新年会です。皆様こぞって賑やかにご参り下さい。

仏教壮年会総会 唯今ご構想中です。

初講 1月29日(日)10時～恒例の習慣に則り、1月最後の日曜日に開催致します。

伝道教学構築の夜明け

お西では、江戸末期に“三業惑乱(さんごうわくらん)”という全国規模の宗学一大論争が巻き起こりました。これは、当時、それだけお念仏のみ教えが盛んだったことを意味します。

事件は社会問題ともなり、宗学上は素人の幕府(政治権力)の介入を許して決着が図られるという苦い経験を宗門は積みました。

このことが契機になって、如来様の行(大行)とは、“お名号”であるとする所行学派、“称えるお念仏である”とする能行学派の論争が巻き起こり、徐々に所行学派が優勢となり、今日のご本山表の“御常教”を形成するに至ったと伝えられます。

最後に空華学派の善讓、鮮妙和上によって、両学派の折衷論として提唱されたのが**溶融無礙(ようゆうむげ)の法体(ほったい)大行説**です。

これは、衆生が称えるまんまが、お名号の働いて下さるお姿そのものである。称名即名号、称即名と巻き上がる(桐溪順忍『教行信証に聞く-上』と称されるものであります。信心獲得の有様を表現したものであります。

ところが、御常教は、自力他力論から、「浄土真宗は信心一つでお救いに与る。信心が前

でお念仏は後だ、お念仏を前にすると自力に陥るから許す訳にはいかない。信心獲得後の報恩感謝のお念仏に限る」という不自由な説きブリに傾き、是が定着してしまいました。

伝道上はまことに困った事象であります。

地域での営みが主流であった戦前まではこれでもよかったのかもしれませんが、御門徒さんが海外にも赴かれ、人口流動化が激しくなった戦後は、このような説きブリでは伝道上大きな支障が残るようになったのです。

信心一つでお救いに与るというけれども、一体その信心はどうやったら頂戴できるかが明らかにされてこなかったからです。

これでは、異教徒異民族はもとより、現代社会コミュニティに於ても、苦悩する人々を支える個の宗教が育つわけがありません。

これを打開するためのヒントは、意外にも実は、溶融無礙の法体大行説に隠されているかと窺われるのです。

桐溪和上に伺えば、親鸞聖人のお念仏は、称えることを通して如来様のお喚び声に遇わせて戴くことに意義があることが分かります。

この場合、称える主体が、諸仏か、隣人が、自分かは問題にはなりません。称えれば聞こえて下さる如来様のお喚(よ)び声に遇わせて戴くことにこそ意義があるというものです。

これはもう一歩進めれば、まだ信心を頂戴していない人々に対して「如来様が願うて下さるのですから、如来様から賜ったお念仏をしましょう。称えれば聞こえて下さるお名号こそは、如来様直々のお喚び声だったのですよ」とご案内する道が開かれていることを意味します。

ここに、伝道教学構築の夜明けが垣間見えるのであります。合掌。